



勇者様にいきなり
求婚されたのですが 3

富樫聖夜

Seiya Togashi

RB

レジーナ文庫

ティアナ

レベル : 2
保有スキル : なし

アルバトロ国第一王女。勇者であるグリードに憧れている。

ルファーガ:
エルフ



リュファス:
魔法使い



ファラ: 女戦士



レナス: 神官



ミリー: 女盗賊



ルイーゼ:
シュワルゼ国
第二王女



登場人物 紹介

アーリア

レベル : 1
保有スキル: 「ツッコミEX」。
(隠しスキル)

ルイーゼ姫の侍女。他称「勇者の婚約者」、自称「勇者の教育係」。グリードを常識ある普通の勇者にすべく教育中。

グリード

レベル : 測定不能
保有スキル: 「精霊の加護」、
「魅了術」その他
いっぱい。

歴代「最強」にして「最凶」の勇者。生きる意味を見出せず感情に乏しかったが、アーリアに出会って変わり始めた。

ノーウエン

レベル : 20
保有スキル: 「癒しの手EX」。

見習い魔法使いの少年。シュワルゼ国王家専属魔法使いの弟子。

目次

書き下ろし番外編	
宰相閣下のある日の出来事	345
勇者様にいきなり求婚されたのですが	7

勇者様にいきなり求婚されたのですが3

1 目指すは「普通の勇者」

ある勇者が恋したのは、美しい姫でした。

別の勇者が恋したのは、治癒師としての力を持つ幼馴染の女性でした。

そのまた別の勇者が恋したのは、稀有な運命に翻弄された少女でした。

そう、いつの時代も勇者が選ぶのは、特別な女性。美しく、気高く、まさに勇者の隣に立つのにふさわしい、そんな素晴らしい女性ばかり。

ところが、当代の勇者であるグリード様が選んだ相手は違っていました。魔王に攫われた美しい姫君——ではなくて、その侍女。美人でもなければ、優れた能力があるわけでもない、ただの女性。歴代勇者の活躍を描いた『勇者物語』ではせいぜい侍女Aという役しかもらえないような、その他大勢の人間です。

言っておきますが、その侍女とグリード様は知り合いですらありませんでした。魔王に攫われた姫様の救出を依頼した時に、ほんの少し顔を合わせただけの間柄です。それ

なのに、凱旋するなりグリード様はその侍女——私、アーリア・ミルフォードに求婚したのです。

これには納得できませんでした。他の誰でもない私が。当然ですよ。かと言って公衆の面前で断ることもできず、「よく知り合ってから」などとお茶を濁して問題を先送りした結果——婚約腕輪を無理やりはめられ、婚約が成立してしまいました。

なん で こ う な っ た ! ?

と思っても後の祭りでした。腕輪を外して欲しいと訴えても、私の身を守るためにも必要なんだと言いくるめられてしまったのです。何でも、勇者様の婚約者として魔族に狙われる可能性があるとか……。結局その後、魔族が城に侵入する騒ぎがあったりして、うやむやになってしまいました。

けれど、流されっぱなしだったわけではありません。国益のためにと私とグリード様の縁談を進めようとする王様と宰相様にキレた私はお二人の前で啖呵を切った後、グリード様に婚約を白紙に戻してくださいとお願いましたのです。が、あっさりと拒否されてしまいました。断ることができない求婚って何なんでしょうか……

こうして「勇者の婚約者」という立場がすっかり定着してしまった私は開き直りました。と言ってもグリード様の求婚を受け入れたわけではありません。その立場を利用し

て、グリード様を調教……もとい、教育しようと思心したので。グリード様は外見こそ整っていらつしやいますが、中身は複雑な生い立ちのせいかズれているんです。情緒の育ち切っていない子供のようなもの。だからきちんと教育していけば、いつかは私への異常な執着も薄れるはずなのです。ええ、そう信じています。

——目指せ、普通の勇者！

こうして私は「勇者の教育係」となり、裏では「勇者の調教師」だの「真の勇者」だのと呼ばれることになったのです。

そして今、他称「勇者の婚約者」で自称「勇者の教育係」である私、アリア・ミルフォードは非常に困っております。

「グリード様。何で私の後について回るんですか。テーブルに着いてください」

さつきから給仕する私の後ろにびったりついて回っているグリード様の行動がよくわかりません。勇者に付き従う侍女ならまだしも、侍女の後ろにくっついてる勇者って何か変ですよ？

けれどグリード様は笑顔で言います。

「少しでも貴女の傍そばにいたいです。今日はお茶をご一緒できないので」

「好きにさせてあげてよ、アリア」

とテーブルに着いている女盗賊のミリー様が口を挟みました。その隣に座る神官のレナス様もうんうんとうなずきます。

「アリアに会いたくしてお茶の席に参加しているようなものだからね」

今、勇者様一行は姫様のお部屋にいらしています。魔族の侵入事件以来、城の結果の強化や魔法の研究、兵士たちの訓練などで忙しくなった皆様は、こうしてお茶の時間に集合して情報交換をされるようになりました。お茶を淹ひれるのが趣味であり特技でもある私としては、腕の見せ所です。なぜか私までテーブルに着かせていただくことも多いのですが、今日は駄目なのです。

「侍女長様に呼び出されているから、急いでるんです。ついて回られると邪魔なんですってば」

本当ならもう行かなくてはいけないのですが、お茶を淹れるのだけは他の侍女に任せたくなくて、大急ぎでしている最中なのです。

「大丈夫です。私が魔法で送ってあげますから」

「遠慮いたします」

私はそんなことを言うグリード様に、カップを載せたお盆を押しつけながら答えました。

魔法つてアレですよね？ この間、魔族が侵入した時に瞬間移動したものの、ひどいめまいに襲われたアレ。冗談じゃありません。

「めまいなど起こした状態で行ったら、侍女長様に叱られてしまいます」

「慣れば魔法酔いしなくなりですよ」

「慣れたくなどありません！ それに言ったはずですよ。城内でむやみに移動の魔法を使つては駄目だつて」

私がそう言うとお盆を手をグリード様にこにこ笑いながら言いました。

「緊急時は例外でしたよね。私にとって貴女のことは最優先かつ最重要で、急を要することですから、問題ないかと」

「問題大ありですよ！ 勝手におかしな基準を設けないでください！」

そんな会話を交わしながら、私は自分の教育がまだまだ不十分であることを痛感しておりました。基本的にグリード様は私の忠告に素直に従ってくれるのですが、私に対する異常なこだわりだけは直らないのです。

一番問題なのは、そこなんですけどねえ。普通の勇者への道のりは遠いようです……

結局、見かねた女戦士のファラ様とエルフのルファアガ様が助け船を出してください、私はグリード様がお二人に言われてお茶をテーブルに運んでいる隙に、部屋から脱出したのでした。でも、こんなことは日常茶飯事、いつもの光景です。侍女長様の呼び出しもお叱りではなく、定例の業務報告と連絡事項の伝達です。

こうして、今日もいつもと変わらない日になるはずでした。姫様の部屋に戻る途中、偶然ある人物に行き合わなければ。

2 嫌味な令嬢は定番です

「あなたのことについては、王様が直々に箝口令を敷かれたらしいわね。まあ、いいご身分なこと」

「……」

「勇者様に求婚されたからっていい気になるんじゃないわよ、たかが侍女風情が」

「……」

私は今、城の廊下でとある貴族のご令嬢から強烈な嫌味を言われている真つ最中です。「あなたが注目されたり特別扱いされているのは、勇者様の婚約者だからよ。あなたが偉くなったわけでも特別なわけでもなくて、勇者様のご威光ゆえなのよ」

いい気になった覚えも、特別だと思つた覚えもまったくございません——と言ひ返したくてたまりませんが、相手は伯爵令嬢なので、そうもできないのが辛いところです。

この方とバツタリ出会つてしまった、我が身の運の悪さを嘆くしかありません。

薄紫色のドレスに身を包み、赤い扇子を手に嫌味を言うこの女性は、エストワール伯爵家の一人娘、ラビニア様御歳十八歳で、薄茶色の巻き毛と神秘的な黒い瞳を持つ大変美しい方です。けれど性格は……

父親であるエストワール伯爵にさんざん甘やかされて育つたらしいラビニア様。さらに、かつて社交界の花と謳われた母親ゆずりの美貌をこれまでずっと持て囃されてきたのだとか。その結果——我儘で高慢なご令嬢へと立派に成長されました。

美貌を何よりの自慢としているラビニア様ですが、しかし上には上がいるものです。……そう、我らがルイーゼ様と姉姫のマリアージュ様です。『シユワルゼウィークリー』という新聞が、年に一度「我が国一番の美女は誰か」というアンケートを国民に

取つて公表するのですが、一位二位は決まって姫様たちで、ラビニア様はいつも三番手。

これにラビニア様はいたくご不満な様子で、姫様たちを敵視しています。もちろんお二人は王族なので、面と向かつて攻撃したりはしません、へりくだった感じで嫌味を言つたり、中傷めいたことを取り巻きに言つたりしているのです。

ルイーゼ様は大人なので、嫌味をやんわりとかわして相手にしないのですが、私たち姫様付きの侍女は憤慨しています。皆ポロクソに言つています。容姿を取つたら何も残らないくせに、とか。

さて、そんなラビニア様ですから、姫様が魔王に攫われた時の反応は——想像がつくかと思ひます。第一王女のマリアージュ様はその時すでに隣国アルバトロにお嫁に行かれていて、この国にはおりませんでした。よつて実質的なライバルはルイーゼ様だけ。

そのライバルが攫われていなくなったのです。あからさまに上機嫌でございました、ええ。城中が嘆き悲しんでいる中、王妃様をお慰めするという名目で城を訪れたラビニア様は、終始笑顔でした。

『やはり、姫様が美しすぎたからでしょうね。魔族の中には、人の世界の美しいものを収集する輩もいるのだとか。姫様は、そんな魔族に目を付けられたに違いありませんわ。ああ、本当に美しさは罪です。私も気をつけなといけませんわね』

……なんてことを言ったのだとか。さらに、『残念ですが、姫様の救出は諦めた方がいいかもしれませんわ。もう、とつくに魔族の餌食えじきになっていくかもしれないよ。このままそつとしておく方が、陛下たちのお心のためにもいいのではないかしら』

と、一緒に城を訪れたどこかの令嬢——おそらく取り巻きの一人——に言っていたらしいのです。それを伝え聞いた時は、身体中の血が沸騰ふつとうするかと思いましたが、私。けれど報いがありました。その話が瞬またたく間に城中に広まって、彼女は王族の皆様や宰相様のご不興ふきようを買ってしまったのです。本人としては、こっそり話しているつもりだったのでしょうか。ですが、彼女たちがいた応接室には侍女が複数出入りしていました。城で働く者たちは王族の方々を慕こたっておりですから、その言葉を許すことはできませんでした。即、上司に訴えたのです。内容が内容なだけに、それはやがて宰相様にまで届きました。そして、哀れラビニア様は謹慎処分となり、さらには無期限の登城禁止を言い渡されてしまったのです。

これは処分としては軽い方です。本来なら不敬罪ふけいざいで牢屋ろうやに入れられてもおかしくなかったと思うのですよ。ですが、エストワール伯の必死の懇願こんがんにより、これだけで済んだのだとか。本当に甘い親ですこと。……牢屋に入れられた方が少しは性格を矯正きようせいできたのではないのでしょうか。当時もそう思いましたが、今はもつと切実にそう思っています。

さて、無期限登城禁止を食らったはずのラビニア様がなぜ城にいるかといえば、実は姫様が無事に戻られて、その上結婚まで決まったので恩赦おんしよが出たのです。だからといって、さつそく城に来るのもどうかと思いますが……。まあ、王族の皆様と宰相様のご不興を買ったことで取り巻きが離れてしまった彼女としては、一刻も早く名譽挽回めいよわんかいのために動きたかったのでしょう。

さすがに今回は、姫様に嫌味を言うこともありませんでした。ですが、謹慎を食らっても取り巻きが減っても、性格は変わっていないようです。『無事にお戻りになって嬉うれしいですわ』と言うラビニア様の目は、ちつとも嬉しそうではありませんでした。無事なだけでなく、リュファス様という大国の皇子と結婚が決まった姫様を前に、悔しさを滲にじませておりました。

リュファス様は大変美形な方で、魔法使いとしても勇者一行に加わることができるほどの実力の持ち主。そんな方と姫様が婚約されたのですから、ラビニア様としては羨ましいやら妬ねたましいやらといったところでしょう。ですが、その感情を表に出すことはできません。そんなことをしたら、また謹慎&登城禁止を食らってしまいますからね。

だからラビニア様は、別の人間に八つ当たりすることにしたようです。そう、勇者グリード様に求婚された侍女風情——すなわち私に。

先日、姫様の部屋にラビニア様が挨拶にいらした時に、ものすごい目で睨まれたので、非常に嫌な予感がありましたのですね。案の定、先ほど顔を合わせるや否や、

「容姿も普通だし、身分も低いのに、こんな子のどこが勇者様はお気に召したのかしら」と嫌味をぶつけてきました。その後、先ほどのような罵詈雑言が続いたわけです。

「一体どうやって勇者様を籠絡したの？ その貧弱な身体で」

そう言いつつ、ラビニア様は私の胸の辺りをじっと見つめます。くうう、自分のが大きいからって！

私はつい、ラビニア様の立派に膨らんだ胸元を恨めしく見てしまいました。姫様とい、ラビニア様とい、顔が良い上に胸までご立派なようです。ケツ。きつとグリード様は貧乳がお好きなんですよ！ と言いつつ返したら、どうい反応をするでしょうか。

でも、侍女の私に口答えは許されぬし、言い返したところでムキになられるだけだと思つたので、ここは黙っているのが一番です。

それに、そんなことを言ったら自分が貧乳だと認めることになるんじゃないですか。私は普通です！ 姫様とか王妃様とか同僚の侍女Bことベリンダが大きすぎるから、相対

的に小さく見えるんです！ ……そう信じています。

「勇者様はどこがおかしいのではなくて？ 私のように美貌も地位もある女性の方がふさわしいのに。やっぱり勇者様とはいえ、所詮は庶民よね。見る目が無いわ」

……私はエプロンをぎゅつと握り締めました。いえ、勇者様がおかしいのは否定しませんよ？ 私なんかよりグリード様にふさわしい人は他にたくさんいると、自分でも思つてますよ？

ですが、他人に改めて言われるとムカツとします。それに、何より腹が立ったのは、グリード様のことを侮辱されたことです。

姫様を助けてくださった恩人に、何という言い草でしょう。いえ、姫様だけではありません。グリード様は、魔王の脅威から私たち全員を救ってくださったのです。それに比べて、たかが小国の伯爵令嬢が、どれほど偉いというのでしょうか。

私は腸がぐつぐつと煮えたぎるのを感じました。それでも、やはり黙っているしかありません。姫様付きの侍女である私が挑発に乗ってしまったら、ラビニア様はそれを姫様を攻撃するためのネタにするに決まっていますから。

……でも、さっさと切り上げるくらいは許されますよね？

私はラビニア様の不快極まりない嫌味が、息継ぎのために途切れる瞬間を狙って言い

ました。

「お話は終わりでしょいか。では私は仕事がありますので、これで失礼いたします」
 そして返事を待たずにお辞儀をして、さつさと歩き出しました。

「ちよ、まだ終わってほ……。もう、何なの！ 侍女のくせに無礼な人ね！」
 そう背後で喚くラビニア様の言葉を、聞かなかったことにして。

私は廊下の角を曲がった後、ラビニア様が追いかけて来ていないことを確認すると、
 ほうっと深い息を吐きました。どうやらぷりぷりしたままどこかに行ってしまうれたよ
 うです。

できれば姫様がエリユーシオンに旅立たれるまで、二度と姿を現さないで欲しいと思
 いますが……無理でしょうね。

侍女長様の話だと、近々、隣国アルバトロに嫁いだマリアージュ様が、夫である皇太
 子殿下を伴って里帰りなさる予定があるのだそうです。そうなると当然、歓迎の舞踏会
 が開かれるでしょう。あのラビニア様が、自慢の美貌をひけらかす機会を逃すとは思え
 ませんもの。

私は廊下の窓のガラスに額を押し付けて、はあとため息をつきました。ガラスの冷た
 さが、ささくれ立った心を多少なりとも落ち着かせてくれるようです。この苛立ちがも
 うちよつと収まるまで、こうしていようと思えます。このまま帰ったら、姫様に心配さ
 れそうですから。

……いえね、私のことはいいんです。嫌味を言うてくるのはラビニア様だけではあり
 ませんから。城を訪れる貴族の令嬢たちの中には、ラビニア様と同じようなことをおっ
 しやる方もいます。あそこまではつきり言われることはありますが、ちよつとした嫌
 味など日常茶飯事です。だから、もう腹も立ちません。またかと思うだけです。侍女歴
 六年。自慢ではありませんが、忍耐力だけはあるんです。

……ですが、命をかけて戦ったグリード様たちを貶めるのは、許せないのです。
 たまにいますよ、ああいう風に庶民だからといって侮る人が。それも、決まっ
 て高位の貴族なんです。そういう人たちは、勇者様が自分たちを守るのは当たり前だと
 考えているんですよ。魔王を倒して姫様を救ったのだから、勇者なのだから当然のこと
 だと。そのくせ、勇者様に阿って媚を売るんです。

当のグリード様は気にしていないようですが、私はどうしても許せません。本来であ
 れば、勇者だからといって、見知らぬ人間まで助ける義理などないと思うのです。勇者
 の役目は魔王を倒すことなんですから。「勇者」という宿命によって歪められてしまっ

たグリード様の生い立ちも知っているだけに、余計に反感を覚えてしまうのです。

あああ、思い出したらまた頭に血が上ってきました！ 頭を冷やすために、こうして窓ガラスにへばりついているというのに。

もういつそのこと、窓を開けて外の空気に当たってしまえ！ そう思って、窓枠に手を掛けた時でした。眼下に広がる中庭を歩く、ラビニア様の姿に気づいたのは。

あの薄紫のドレスと薄茶色の巻き毛は間違いありません。おそらく帰るところなのでしよう。馬車が待機している東棟の方へ向かっています。優雅というには多少、足の運びが速いところを見ると、私に対してまだご立腹のようです。背中に「不機嫌」という文字が見えるのは、絶対に気のせいではないと思います。

そして、ラビニア様とは離れています。同じ中庭には我が国の第二王子であるアルフリード様の姿もありました。ですが、一人ではありません。護衛の兵士はもちろんのこと、数人の大臣と文官たちもいます。彼らは、隣国アルバトロの紋章が付いた立派な馬車から降りて来た、初老の男性を出迎えているようです。

王子であるアルフリード様が直々に出迎えるなんて、どうやら相当の賓客のようです。彼らは隣国の重要人物と思われるその男性を案内しながら、主塔に向かってゆつくりと

歩き始めました。

ラビニア様がそんな彼らに気づいたのは、おそらく私とほぼ同時だったと思います。

いくらモブ顔で存在感が薄いとはいえ、相手は第二王子。挨拶して媚を売ろうとでも思ったのか、東棟へ向かっていた足を、彼らの方へ方向転換したのでです。

アルフリード様たちにどンドン近づいていくラビニア様。そして、彼女がまさに声をかけようと口を開いたその時でした――

ラビニア様の身体が、何かにつまずいたように前方に傾いたのです。慌てて手を振り回してバランスを取ろうとするラビニア様ですが、足はまるで地面に縫いとめられているかのように動きません。そうなると当然、傾いた身体をどうすることも出来ず――ラビニア様はベシヤツと地面に倒れ込みました。それも、顔からです。

バンザイした状態で地面に伏すラビニア様。そして、目の前で起こった出来事に啞然とするアルフリード様一行。私も三階の窓から、口をあんどりと開けて眺めておりました。ですが、これで終わったわけではなかったのです。

いきなり突風が――それもラビニア様付近のみに吹いて、地面に突っ伏したラビニア様のドレスがめくれたのです。パフツという感じで一気に腰の辺りまで。そして、めくれたドレスの下から現れたのは、白さがまぶしいレースのパニエでした。

そのレースを幾重にも重ねたパニエも、再び起こった風でめくれ上がり、結果——ラビニア様の白いドロワースに包まれたお尻とそこから伸びる素足が、思いつきり晒される事態になったのです。アルフリード様、隣国からの賓客、大臣や文官や兵士たちの目の前で。

中庭の空気が一瞬凍りつきました。顔を強打したと思われるラビニア様は、その痛み
のせいか伏したままで、ご自分がどんな状態になっているのか気づいていないようです。
あの場で今一番困惑しているのは、おそらくアルフリード様ではないでしょうか。女
性が倒れたら抱き起こすのが紳士というもの。ですが、下着を晒している女性においそ
れと触れることは、さすがに出来かねるでしょう。めくれたドレスを元に戻すこともで
す。それは、アルフリード様の周りにいる兵士や文官たちも同じです。目を逸らしたり、
そわそわしたり、皆一様に困惑しているのが三階からでもはっきり見て取れました。

えっと……どうしよう？ 皆様の心情を代弁するとそんな感じでしょうか。せめて女
性が誰かしら中庭にいればよかったです。あいにく男性ばかりです。それでも、賓
客の前でいつまでもこんな状態ではいけないと思っただのか、アルフリード様がおそろ
そるといった様子でラビニア様に何やら声をかけました。

たぶん「大丈夫か？」というようなことを言ったのでしょね。ラビニア様はその声



に應えるように顔を上げ——そこでようやく自分の状態に気づいたようです。何しろ、下半身を隠しているはずのドレスの裾が、頭の上にかかっているわけですから。

「きゃあああああ!!」

中庭全体に響き渡る——どころか窓越しでもはつきり聞こえるほどの甲高い悲鳴をあげたラビニア様は、痛みなど忘れたようにガバツと跳ね起きました。そして辺りを見回し、大勢の注目を浴びていることを認めるや否や、今度は「いやあああ!!」と叫んで馬車の方へ駆け出しました。

それは、女性にしては驚くほどの速さでした。ドレス姿で走るのは、はしたない行為なのですが、今は礼儀なんて構っていられないのでしょうか。ドレスを翻して馬車に飛び乗ると、御者に向かつて、これまたヒステリックに叫びました。

「出して! 早く出すのよ!」

そうして、車輪の音を高く響かせながら、エストワール伯爵家の馬車は城から出て行きました。

後に残されたのは、困惑顔の男性たちでした。この国で三番手に位置する美女のあらぬ姿に、どう反応したらいいのかわからないのでしょうか。笑っている

のか、同情するべきなのか、それとも良いもの見られたと思うべきか等々。

その何とも言えない空気を打ち破つたのは、例の賓客でした。彼がアルフリード様に何か声をかけたのです。それに対し、ホツとしたようにうなずき返すアルフリード様。そして、二人はゆつくりと主塔に向かつて歩き出しました。彼らにつられるように動き出す大臣や文官、そして兵士たち。

さすがは重要な地位にいる方です。こちらの失態に目を瞑り、スルーしてくださいました。

私は開いた口を閉じるのも忘れて、建物の中から一連のを見ておりましたが、アルフリード様たちが動き始めるのを見届けると、ようやく口を閉じ——そして、次の瞬間には嘖き出しておりました。

他人の不幸を笑ってはいけないと思いつつも、我慢できません。脳裏にあの白いドロワース姿が焼きついて、離れないのです。手で口を押さえながら、私はくすくす笑い続けました。

今回のことは、ラビニア様にとっては謹慎や登城禁止よりはるかに辛い罰になったのではないのでしょうか。だって、この話は絶対に面白おかしく広められますもの。王子の

前で、さらに賓客ひんきやくの前まへでの粗相そそうは、プライドの高いラビニア様にとって何よりの痛手となるに違いありません。

気の毒だとは思いますが。けれど、これでしばらくの間は城に顔を出せないだろうと思うと、愉快になる気持ちを抑えることができません。他人ひとの不幸は蜜の味ってこういうことを言うのでしょうか。ぶつぶ。それにしても、あのドロワース姿といたら……！　ようやく笑うのをやめて目尻に溜たまった涙を拭ぬぐうと、私は顔を上げ、何もない空間に向かつて言いました。

「あの、ありがとうございます。おかげさまで、ちょっと溜飲りゅういんが下がりました」

ラビニア様の身に起こった不幸な出来事は、言うまでもなく精霊たちの仕業しわざでしょう。だつてコケるだけならまだしも、ドレスがめくれ上がるほどの風が、タイミングよく吹くわけありませんもの。

ドレスって、布やレースを何枚も重ねているからけっこう重たいんですよ。特に、あいつたフレアのドレスは。多少風が吹いたくらいで、めくれ上がるものではありません。ましてや、ラビニア様の周囲だけ突風が吹くなどあり得ないことです。

私の悪口——というよりグリード様に対する侮辱おとしよくに腹を立てて、ラビニア様にお仕事をしたのだと思います。精霊たちはグリード様のごが大好きなので。いささかやり

すぎの感はありませんが、グツジョブと言いたいです。おかげでエリユーシオンに行くまでの間、ラビニア様と会わなくて済みそうです。私のお礼に応えるように、風がふつと私の頬を撫でていきました。一回、二回と。それに、気のせいでしょうか、何やらくすくすと楽しそうに笑う声が聞こえたような？　だけど、廊下にいるのは私だけ。他に人の姿は見えません。私は生まれて初めて、精霊の気配を感じられた気がしました。

知識の上では、いることがわかっている存在。けれど、決して見ることはできなかつた遠い存在。それを、確かに感じられたのです。私は、知らず知らずのうちに笑顔になっていました。ラビニア様と遭遇そうごうした後のささくれ立った気持ちはずっと消えうせ、残ったのは何だか楽しく、そして温かな気持ちでした。

私は「姫様の部屋に戻りましょう」と何もない空間に向かつて言うと、軽い足取りで歩き出しました。

けれど、心の中でしつかりツツコンでおくのを忘れません。

……やっぱり私、精霊にひつつかれて行動を監視されているんですね——と。

3 場所が変わればイベントが起こるもの

「あれ、ノーウェン君？」

ラビニア様事件から数日経った今日、城の通用門に向かう途中で見知った人物を見かけた私は、思わず声をかけました。

「あ、アーリアさん。こんにちは！」

振り返ってそう言ったのは、ふわふわな茶色の髪と翡翠ひすいのような目を持つ少年。見習い魔法使いのノーウェン君でした。王家専属の魔法使いである、ファミール様のお弟子さんです。

「ノーウェン君は、お遣いですか？」

彼も通用門に向かつて歩いていましたが、魔法使いのローブは身につけたまま。休暇で外出するのなら私服に着替えるでしょうから、おそらく仕事で外出するのでしょう。

実は、魔法使いの外出は厳しく制限されているのです。休日でも城の外に出るには許可が必要で、その許可もなかなか下りないくらいです。

というのも城の結界を維持するためには、一定の魔力を注ぎそそ続ける必要があるからです。その役割を担っているのが、ファミール様を筆頭とする国付きの魔法使いたち。彼らが仕事場であり住居でもある「魔法使いの塔」にいただけで、城の結界に魔力が供給される仕組みになっているのです。そのため、城内にいる魔法使いの人数は、神経質なほど管理されているのです。

ノーウェン君はまだ見習いなので外出許可が下りやすく、よく他の魔法使いたちに用事を頼まれて城下町に下りるそうです。案の定、ノーウェン君は私の言葉にうなずきました。

「そうなんです。お師匠様のお遣いで、城下町の魔具屋に行く予定なんです。アーリアさんは休日ですね？」

確信めいた口調なのは、私がいつもの侍女服ではなくピンクのワンピースを着て、買い物籠かごを持っているからでしょう。私はにっこり笑ってうなずきました。

「ええ、まる一日休暇をいただいたのです」

半日の休みは時々あるのですが、まる一日の休みをいただいたのは、とても久しぶりです。

実は侍女というのは休みが少ないのです。主あるじの身の回りのお世話をするという仕事の

性質上、交代で休暇を取るしかありません。さらに、姫様付きの第一、第二侍女くらいになると、ますます休みは少なくなります。姫様のお世話という大切な仕事を慣れない新人だけに任せることはできないからです。

おかげで私とベリンダは、姫様の公務の予定などを考慮しつつ、半日ずつ交代で休みを取るようになってしまいます。だから、まる一日休みを取ることができたのは、何ヵ月ぶりでしょうか。

実はこの休暇を取ることになったのは、隣国アルバトロに嫁がれたマリアーヂュ様の里帰りが決定したからなのです。

魔王に攫さらわれた妹のルイーゼ様をいたく心配しておられたマリアーヂュ様ですが、皇太子妃ともなると、隣国とはいえおいそれと里帰りはできません。ですが、どうしても妹姫の無事をその目で確かめたいという希望が叶い、里帰りが実現することになったのです。しかも、今回は夫君であらせられるロートリッシュ皇太子殿下と、その妹のティアナ様も一緒にされるとか。つまり、隣国の王族が一度に三人も訪れるわけです。

ラビニア様のドロワース事件に居合わせた賓客ひんきやくらしき男性。あの方はアルバトロの外務大臣で、その件について協議するために訪問されていたのだそうです。お忍びならと

もかく、一国の王族が他国を公式に訪れるというのは、ものすごく大変なことなのです。いろいろな手順を踏む必要がありますから。

これがマリアーヂュ様だけならまだしも、皇太子殿下に、我が国の王子様方のお妃候ききょう補にも名前が挙がっているティアナ様までいらつしゃるのですから、そりゃもう、お祭り騒ぎです。歓迎式典やら舞踏会やらが開かれるのは必至なので、今から城中がその準備に追われているのです。

私たち侍女は、基本的に主の世話をするのが仕事。ですから今回も、歓迎式典や舞踏会に備えて姫様のドレスを用意したり装飾品を選んだり、準備といってもそんなことだけで済んだはずでした。しかし侍女長様の依頼で、私たち姫様付きの侍女も何人か、舞踏会の準備を手伝うことになったのです。当然、その間は姫様のお世話をする人数が減るわけですから、休みは取りづらくなります。なので先に休暇を取っておこうということになり、私も前倒しで休みをもらえることになったわけです。

「それで城下町に？」

ノーウェン君の問いに、うなずいて答えます。

「ええ、こんな機会でもないといけないですからね」

今までも、半日の休暇を利用して城の外に買出しに行ったりはしていました。しかし、姫様が攫さらわれてからというもの、とても外出する気になどなれず……。姫様が帰って来た後も、勇者様の求婚騒ぎで新聞記者などに狙われていることもあり、城の外に出ることはできなかつたのです。

もちろん、まだ城の近辺を『勇者タイムズ』の記者がうろついていることに変わりはありません。ですが先日、城の外に出たベリンダが、記者に呼び止められて見せられた例の号外。その紙面を飾った私の似顔絵——それも目隠し無しバージョン——は、私にまったく似ていなかったらしいのです。おそらく記者が、城の誰かから聞いた話を基に描いたものの、どこにでもいる顔なので、特徴を捉えられなかったのでしょう。それなら記者など怖くありません。ふっ、モブ顔万歳ですよ。

……いえね、私だつて馬鹿ではないですから、危険は承知しています。勇者様の（不本意ながら）婚約者として、記者だけではなくその他のよからぬことを企くわだてる者たちにとつても、絶好の標的になり得るでしょう。ですが、一生城の中にいるわけにはいきません。お茶っ葉も補充しなければならぬし、実家の母に街で人気のお菓子などを手紙と一緒に送つてあげたいのです。

幸いにも、王様や宰相様による情報統制が効いているのか、私の名前や正しい容姿はまだ漏れていないようです。だから、今なら大丈夫かな、なんて思うのです。警護の間を付けてもらうことも考えましたが……。この街娘が、兵士を引き連れて買い物をするでしょうか。……値切れんわ！

グリード様たちは論外です。頼めばついて来てくれるのでしょけれど、誰があんな目立つ連中を連れて歩きたいのですか。一緒に歩くなど、私が（不本意ながら）グリード様の婚約者であると宣伝しているも同然ですもの。それに今回、勇者様ご一行には外出のことは伝えていません。知っているのは姫様とベリンダだけです。

ノーウェン君は、顔を綻ほころばせて言いました。

「外出は楽しいですよね。僕も仕事とはいえ、城下町に下りるのがすごく楽しみなんです。あ、でも記者がうろついているらしいので、アーリアさんはくれぐれも気をつけてくださいね」

「ええ。もちろん」
 と言いつつも、私はあまり心配はしていませんでした。だって——私には秘密兵器があるのですから。

先日のラビニア様事件の時に確信したことです。私はグリード様たちの命を受けた精霊に張り付かれています。おそらく、彼らは私を監視するだけじゃなくて、危険

から守るといふ命も受けているのではないかと思つたのです。私に会おうとするアルフレード様の妨害をしているくらいですから、本体を守れと命じられないわけがないですものね。……というか、守護しろよとツッコミを入れさせていただきます。

つまり、私には目に見えない護衛がついているも同然なのです。これを利用しない手はないではありませんか。それに、グリード様にはその精霊を通して私の行動が筒抜けのはずなのに、ここに至るまで妨害がなかったということは……外出を許可されたも同然ですよ？ ええ、特に聞きもしませんが、そう思うことにいたします。

「じゃあ、楽しんで行って来てください」

「ノーウェン君も、お仕事しつかりね」

別の知り合いに呼び止められたノーウェン君と挨拶を交わして別れ、私は通用門に向かいます。

「こんにちは、お疲れ様です」

あれ？ という顔をする守衛の兵士に声をかけて、通用門から城の外へ一歩踏み出しました。

久しぶりの外出に浮かれる私は、その時左の手首にある婚約腕輪が一瞬だけ光ったことに、気づきませんでした。

* * *

門を出てすぐ、城下町へ続く坂で、私はさっそく記者らしき若い男と遭遇してしまいました。しかし、彼は城から出て来る人間に片っ端から声をかけているだけで、私を「勇者が求婚した侍女Aさん」だと認識していたわけではありません。

ペリンダが言っていたことは本当でした。彼が手にしていた似顔絵は、目隠しされた状態だと似ているようにも見えましたが、目隠しのないものは何か違うのです。似ているといえは似ていますが、それを見て絶対私だと思えるようなものではありません。

私は、これはいける！ と思いました。城の食堂で働いているペリンダですと名乗り、すつとほけたのです。それでも、ちよつとばかり疑われてはいたようですが、精霊さんたちの協力で彼が転んでいる間に、さつさと逃げることに成功したのです。ふう。

と、初っ端しよばなから記者に出くわしてしまいました。気が取り直して私は坂を下りました。シユワルゼの城は高台に築かれていて、その城を中心に、放射状に城下町が広がっています。城の正門から続く道を進めば、やがて街のメイン通りに出ます。

メイン通りの、城に近い一画には貴族たちの邸宅が立ち並び、その付近はお店も高級

店ばかりです。城の御用達である高級茶屋もその界隈にあるらしいのですが、私が行くのはそっちではありません。坂の途中で、私は脇道へ入りました。その先には庶民の住宅とお店が集まるエリアがあるので。

この街はシユワルゼ国の王都ですから、世界各地からいろいろなものが集まってきます。通りは、荷車を押す人や店先でお客と話す店主、私と同じような格好の女性など、様々な人たちがいて、活気に溢れていました。私は完全に街娘として周囲に溶け込……いえ埋没しながら、商店が立ち並ぶにぎやかな通りを進みます。

途中、お菓子屋さんでエリユーシオン産のブラウンベリー入りクッキーを購入したり、雑貨屋で持っている茶器にピツタリなティーコゼを購入したりします。街の人に交じつての買い物はとても楽しく、気分はウキウキワクワクです。城の中で生活している時には味わえない、何とも言えない解放感に、私は自然と笑顔になっていました。

こうして街娘気分を満喫する私が最後に訪れたのは、今日の買い物の最大の目的でもあるお茶屋さんでした。

姫様が魔王に攫われる前は休みをいただくたびに、ここでお茶っ葉を買っていました。王室御用達の高級茶屋は取り寄せた茶葉をただ売るだけでなくに接客もしてくれませ

が、この店は違います。店主のおじさんが研究熱心で、お茶に関することなら何でも答えてくれるのです。値切りにも応じてくれるし、オマケをくれることもあります。

……ちなみに、高級茶屋は値切りにはまったく応じてくれません。ちえっ。

「おじさん。お久しぶりです！」

私は店の中でお茶を啜っている、頭の禿げかかった店主に声をかけました。

「おや、アーちゃんじゃないか！ 久しぶりだね、最近来ないから何かあったのかと心配してたよ」

「すみません。いろいろあつて外出がままならなかったんです」

おじさんは私のことを「アーちゃん」と呼びます。というか、常連客は誰でもそんな風と呼んでいるのです。ダールスという名前のいい年したオッサンを「ダーちゃん」と呼ぶのを聞いた時には思わず「そりゃないだろう」というツツコミが喉まで出かかりました、ええ。

アリアだから「アーちゃん」。ダールスだから「ダーちゃん」。ネーミングセンスは皆無のようです。私がベリンダという名前だったら、「ペーちゃん」って呼ばれていたに違いありません。……アリアでよかったです。何となく。

どうしてお客を愛称で呼ぶのか、おじさんの奥様に聞いてみたところ、どうやら人の

名前を覚えるのが苦手なようです。それで、覚えやすい愛称をつけているらしいんですよね。

おそらく、おじさんは私が「ア」のつく名前であることのみ記憶しているのでしょう。……まあいいんですよ。どうせモブ顔ですから、正式な名前を覚えてなくても。だってそれが私を助けることもあるのですから。ほら、現に今だって――

「確かお城に勤めているって言ってたもんなあ、アーちゃんは。姫様が魔族に攫さらわれて戻って来たと思つたら、今はその姫様を助けた勇者の一行が滞在しているというし、そりゃあ忙しかろうよ。……あれ？　そういえば号外に出ていた、勇者が求婚した侍女Aって……」

おじさんが私の顔をマジマジと見つめるので、思わずギクリとしてしまいました。鼓動がバクンバクンと大いに乱れます。だって不意打ちだったんですもの！

ですが、どうにか平静を装って答えました。

「私ではありません。だって、私は侍女ではなくて食堂の給仕係ですから！　同じような茶色の髪と瞳だし、Aから始まる名前だからよく間違われますが……違いますからね？」

その言葉に、おじさんは「そうだなあ」と笑いました。

「あの号外の絵はわかりづらいよな。茶色の髪に茶色の瞳なんていう大雑把おぼろげな情報じゃ、当てはまる人間はたくさんいるに違いないさ」

「ええ、そうですよ。私のようなモブ顔など、いくらでもいますとも！」

……今日の私の演技力は冴さえているかもしれない。にわかに自信を持った私は、その後のおじさんの言葉にも動じませんでした。

「アーちゃんは名前もAだしな……って、そういえばアーちゃんの名前って何だったかな？　ごめんよ、おじさんすっかり忘れちゃったよ」

ハハと笑って頭の後ろを掻くおじさんに、私はにっこり笑って答えました。

「アミーリア。アミーリアです。おじさん」

妙に偽名を使うハメになる日です。今日の私は記者にはペリンダ、そしてお茶屋の主人にはアミーリアです。共通項は、食堂で働いていること。……ふむ、心のメモに忘れずに書いておかないといけませんね！

別に、おじさんには本名を名乗ってもよかったです。万が一、勇者の婚約者の名前が「アーリア」だということが漏れたりしたら困りますからね。念には念をです。だって、シュワルゼを離れるその日まで、このお茶屋さんには通い続けたいですから。

……さて、お茶屋に来たからには、お茶っ葉を買わねばなりません。

「おじさん、レイクサリダ産の二等茶葉と、いつものブレンドのやつ下さいな。量はいつもの倍で。あ、そういえばこの前買ったベルガモットのフレーバーティーですが、気に入ってくださる方と匂いが気になるという方が半々でした。もつとも、他の茶葉をブレンドすれば気にならないって方がほとんどでしたけど」

「好みだからなあ。だけど一度気に入ると癖になるんだよね、あれは」

「私も気に入ったので今回も買います！ あ、ミンドルク産の茶葉も入荷してる！」

「勇者が魔王をやっつけてくれたおかげで、ようやくミンドルク産の茶葉も出回るようになったよ」

「うん、うん。勇者様には感謝ですね。このミンドルク産の二等茶葉も下さいな、おじさん」
「まいど〜」

「もちろん……まけてくださいね？」

私は首を傾げ、にっこり笑っておねだりしました。まあ、私なんぞがやってもたいして可愛くないとは思いますが、これが意外と店主には有効でして……

「もう、仕方ないなあ。他ならぬアーちゃんの頼みだ。まけてやらあ！」

「わーい。おじさん、ありがとうございます！」

ああ、この値切れた時の充足感……！

え？ 貴族の令嬢らしくない？ ええ、ベリンドにもよく言われます。ですが、ちょっとでも安くしてもらった方がいじゃないですか。貧乏な男爵や子爵の生活なんて、下手すれば裕福な商人より質素なのですから。

ちなみに、貴族の令嬢がこうして自ら街に買い物に出ることは少なく、商人を屋敷に呼びつけて買うのが一般的です。

「アーちゃんは大切な常連だし、お茶の研究仲間だしね」

バチンと器用に片目だけ瞑つぶってみせるおじさん。私はそれにも笑顔で応じました。ええ、まけてくれるならいくらでも笑顔になりますとも。それに、今は値切れて嬉しいので自然と笑顔になっています。

その時、不意におじさんがぶるつと身体を震わせました。

「おじさん？」

「いや、何か急に寒気が……」

両手で自分の身体を抱きしめながら言うおじさんに、私は同情の目を向けました。「風邪のひき始めかもしれません。お大事にしてくださいね？」

目的のお茶つ葉を格安で手に入れてご満悦の私は、おじさんに挨拶あいさつをして店の外へ出

ました。母へのお土産は買ったし、ティーコゼも買ったし、お茶っ葉も買ったので、外出の目的は全て果たしたことになります。

いつもなら、買い物を終えた後も街中を散策したり、新しい店の開拓をしたりします。けれど、今日はこれで打ち止めにした方がいいかな、なんて思うのですよ。というのも、物語の中では場所を移動すると、イベントというものが起きるのが定番なのです。いつまでも同じ場所だとマンネリ化するので、場所を移動させることによってストーリーを回すという、お話作りの常套手段なのだから。

もちろん、これは物語ではなくて現実ですから、私が城の外に出て街をふらふらしているからといって、そんなイベントに遭遇することは無いと思いますけどね。……でも、用心するに越したことはありません。私は、来た道を城の方へ戻り始めました。

ところが、少し歩いたところで見覚えのある胡散臭い顔を、前方の人ごみに発見してしまったのです。

それは、城の外で出会った新聞記者でした。例の似顔絵を手にしていますから、間違いありません。しかも、彼はその似顔絵を時々見つつ、誰かを探すようにキョロキョロしているではありませんか。

もしかして、もしかしなくても私を追って来たのでしょうか？ コケたのを無視して

行ってしまったから腹を立てた……なんてことはあり得ないですよ！

やはり、私が侍女Aだと勘付いた……ということでしょうか。確信するには至らなくとも、記者の第六感が働いたのかもしれない。

私はとっさの判断で、彼がこちらに気づく前にさっと横道に入りました。そして、念には念を入れて、さらにその横道に入ろうとしたのです。

治安の良い街ですが、犯罪がまるつきりないわけではありません。なので、普段の私なら決して裏道に入ったりはしないのです。けれど、記者が通り過ぎるのを待つ間だけ——そう思っただけの行動でした。

そう、私はこの時スポンと忘れていたのです。場所が変われば、イベントが発生する確率が高くなることを。

——角を曲がった私は、ぎよっとして足を止めました。だって、そこには思いもよらない光景があったのですから。

所々崩れている塀。所々抉れている地面。そして、肩で息をしている見習い魔法使いのノーウェン君。

——それだけではありません。

ノーウェン君は険しい表情で、空を見上げています。その視線を追った私は、目を見

張りました。

「……え……？」

——その男の第一印象は、黒。

シンプルな黒いズボンに黒いシャツ。そのシャツの襟に届くくらいの長さの髪は群青色です。とても濃く、暗い蒼……だからでしょうか、全体的に黒っぽい印象を受けるのは。

男は腕を組み、悠然とノーウェン君を見下ろしておりました。笑みを浮かべているその顔は美形の類です。ですが、私が驚いたのは美形だからではありません。最近、私の周囲は美形率がとても高いので、そんなことではもう驚きはしないのです。

私がぎよつとしたのは、男が宙に浮いていたから。そして——長い前髪から覗くその瞳が、血のように赤い色をしていたからです。

私は、その姿を呆然と見つめながら思いました。

——こんな遭遇イベントはいりません、と。

魔族といっても、姿形は様々です。

私たちが魔族と言われてすぐに思い浮かべるのは、獣の姿をした魔族と呼ばれる存在。時々旅人や村を襲ったりするので、冒険者ギルドへの討伐依頼が絶えないのもこの魔族

です。魔族は獣の姿をしているため、知能はあまり高くありません。言葉もしゃべりません。魔族の知能は、器となる生物の知能に準じているのです。

ならば、もつと知能がある生物の姿をとればいいと思うのですが、獣の姿をとるのはあまり魔力がないせいです。器の形成にはかなりの魔力を必要としますから、魔族はそれぞれの魔力に見合った姿しかとれないのです。

魔族の中でも魔力が高いものは、人間に近い姿をとり、知能も高いです。そして——どういうわけか、魔力が高ければ高いほど、魅力的な容姿をもつのだとか。

ですから、歴代の魔王はそれはそれは美しい姿をしていたそうです。……この時代の魔王は別として。大切だから二度言います、マッチョ魔王は別です。でも、きつとあれが彼にとつては、もつとも美しい姿だったでしょう（遠い目）。

要するに——目の前にいる美形の魔族は、それだけ強大な魔力を持っているということです。

おそらく魔王配下の幹部……もしくはそれに準ずる力を持っていると思われる。

そんな高位の魔族がなぜこのような場所にいて、しかもノーウェン君と戦っているのでしょうか。確かに、魔族は魔力を持つ人間を好んで襲う傾向があるらしいのですが……。とはいえ、相手は魔法使い見習いの少年ですよ？ 偶然に出会ってしまったのでしょ

うか。

いずれにしろ、マズイ場面に飛び込んでしまったのは確かです。これなら記者にとっ捕まる方が、何倍も良かったと思います。……このまま何も見なかったことにして、回れ右をしてはいけませんかね？

などと思っていたら、その魔族のお兄さんに気づかれてしまいました。ええ、残念なことに。腕を組んで宙に浮いていた彼は、その血のように赤い瞳で私を捉え、眉を上げたのです。

「闖入者とは……。厄介だねえ」

口調はノンビリとしているものの、表情は何となく不快そうです。ああ、嫌な予感がします！

だって私はレベル1のモブ。主役や準主役ならともかく、ただのモブが魔族を目撃してしまつたら——あっさり殺られて不可解な死体を残すか、あっさり消されて何もなかったことにされるのが定番じゃないですか！ ヤバイです、身の危険を感じます！

「アーリアさん、逃げてくださいー！」

魔族の言葉で私に気づいたノーウエン君が、ハツとして言いました。

「は、はい！」

私は一も二もなくその言葉に従い、踵を返しました。

ここで物語のヒロインなら、「そんな、あなたを置いて一人で逃げるなんて！」くらいは言ったかもしれません。ですが、それって逃げずにどうにか出来る実力があるからですよ？

くだいようですが、私は魔力ゼロのその他大勢キャラなんです！ 魔族に対抗できる力なんて、持ち合わせてません。どう考えても、足手まといにしかならないじゃないですか！

この場に留まれば、ノーウエン君はただでさえ不利な状況なのに、私まで庇わなくてはなりません。けれど、私がいなければ彼は自分を守ることだけに集中できるのです。

——そう、ここは逃げるのが最良の選択です。それに、逃げれば援軍を頼むこともできますから。

そう思つて走り始めた私ですが、数歩しか進まないうちに、何かにつまずきました。あつと思う間もなく、上体が前に傾きます。

こ、こんな場面でコレ!? まさかの大失態ですか!? 両手に物を持ったまま城をちょこちよこ歩き回つても、ほとんどコケたことがない私が、この大事な場面では？

う、嘘でしょうー！

心の中で絶叫しつつ、私は倒れていきました。

「アーリアさん！」

地面に倒れ込むのと同時にノーウェン君の焦ったような声が響き、何か私の頭上を通り過ぎていく気配が感じられました。——直後に響いたのは、ドゴオというすさまじい音。

「……え？」

顔を上げた私の目に映ったのは、路地を挟んだ向かいの壁にぽっかりと開いた穴でした。ここを曲がった時には、その白い壁に穴などなかったのに。

さつき頭上を通り過ぎたものの正体を悟り、私はゾッとしました。

……もし、転ばなかったから……今頃は……

ですが、そんな想像をしている暇はありませんでした。

「おやおや、運の良いお嬢さんだ」

「アーリアさん、逃げて！」

悲鳴のようなノーウェン君の声にハッとして、慌てて身体を起こし、後ろを振り返りました。すると、さつきまで空中にいた魔族が、いつの間にもやら私のすぐ後ろに立っていたのです。

「表の通りにいる人間に気づかれないよう術を施したのに、どうして飛び込んで来ちゃうんだらうね。困るんだよ、見られるのは。計画が台無しになるからね」

魔族が言っていることはよくわかりませんでした。けれど、裏通りとはいええ、すぐ近くに多くの人が行き交う大通りがあるのに、あんなにすごい音がしても誰も様子を見に來ない理由はわかりました。

それなのに、私は意図したことではないとはいえ、わざわざ自分から飛び込んでしまったのです。何たる引きのよさ……いや、運の悪さなのでしょう。それもこれも、全部あの記者のせいです。

「だからね」

魔族の男がにつこり笑いました。それは残酷な愉悅を含んだ笑みで……

「可哀相だけど、生かしちゃおけないんだよね」

その唇から零れたのは——死刑宣告。

可哀相などと少しも思っていないのは明白でした。この人（人ではなくて魔族ですけれど）にとっては人間の命など、塵にも等しいものなのでしょう。

ひゅうと喉の奥が鳴りました。……怖い、と思いました。

一応領主の娘として育ち、働き出してから安全な城の中で守られていた私は、この

時生まれて初めて命の危険を感じたのでした。

「アーリアさんっ！」

ノーウエン君が慌てて、何かの魔法を詠唱し始めたのが目の端に映ります。私は、彼の邪魔にならないように逃げなければなりません。そう思うのに、血のような赤い目に見据えられた私は——その場から動くことができませんでした。

「炎の蔓」

最後の単語を唱えたノーウエン君の目の前に、炎をまとった紐のようなものが浮かびました。

「行け！」

という彼の声と共に、それは鞭のようにしなり、魔族の男に背後から襲いかかります。ですが——

「子供だましの術だねえ」

くすくす笑いながら、魔族の男は振り返りもせず、パチンと指を鳴らしました。すると、今にも男に巻きつかんとしていた炎の鞭が、一瞬にして形を失ったのです。まるで燃え尽きて灰になったかのように。

……子供だまし。魔族の男にとつて、ノーウエン君の術はそれほどお粗末に感じられ

たのでしよう。

でも実力にそこまでの差があるというのに、なぜ周囲に知られないよう魔法をかけてまで、ノーウエン君を狙うのでしょうか？ ……やっぱり、おかしくないですか？

人間が嫌いだから。魔法使いが憎いから。ただそれだけの理由で気まぐれにいたぶっていることも考えられますが……それにしても、見習い魔法使い相手にこんな手の込んだやり方をするでしょうか？ それに、さつき「見られたら計画が台無しになる」って言うって……

私の思考はそこで途切れました。なぜなら、ノーウエン君の魔法をあつさり粉碎した魔族の男がこう言ったからです。

「こんな魔法で俺を止めようだなんて、笑えるね。まあ、君はそこで自分の力不足を嘆きながら、大人しく見ていればいい——このお嬢さんが死ぬところを、ね」

男の肩越しに、ノーウエン君がこちらに駆け寄ろうとして何かに邪魔され、もがいているのが見えました。でも、私にはそれを気にする余裕はありませんでした。

……男の目が、びたりと私に向けられていたから。

二度目の死刑宣告をされて、私は心の底から震え上がりました。

その時です。ヒュンという空気を切り裂くような音がしたかと思うと、男の頬に赤い

線が現れ、ぱつくりと割れたのです。さらに、ズウウンという低い音と共に足元に振動が走り、轟音こうおんが響いて——男が立っている場所の地面が、いきなり陥没かんとぼしたのです。

「え？」

私は目の前で起きたことに、啞然あぜんとしました。

「これは——」

地面が陥没するその瞬間、空に飛び上がって難を逃れた魔族の男は、驚愕きょうがくの表情を浮かべました。

「魔力じゃない……?」

男は何かを確認するように、頬の傷口に指を滑すべらせました。

魔族の器は魔力で形成したものですから、血が出ることはありません。痛覚もないのか、男は痛がる素振りもありません。

さらに、男は陥没した地面を見て眉をひそめました。

「これは——精霊の力、か？」

その言葉に、私はハツとしました。

精霊——ああ、そうです。グリード様が私につけた精霊が、私を守ろうとしてやっただけに違いありません。あああ、ありがとうございます、精霊さんたち！

「魔力は感じられないが——お嬢さんは精霊使いなのかな？」

空に浮いた魔族の男が、私に視線を向けました。その表情からは、敵意のようなものが感じられます。さっきまで、男は私のことを「その辺に転がっている石ころのような、邪魔なモノ」という目で見ていました。しかし、今は「私」という個の存在を認識している、そんな感じなのです。

……少しも嬉しくありませんけどね。

「——精霊使い？」

私はその聞き慣れない言葉に、首を傾かしげました。

「君たち人間が【精霊の加護】と呼ぶ能力を持つ者のことだよ」

【精霊の加護】——それはグリード様を持っているスキルのこと。

精霊に護まもられ、その力を使えるという稀有けうな能力。勇者には必須のスキルとされ、勇者候補に挙げられる人間は、必ず備えています。

……不意に、嫌な予感が胸をよぎりました。

もしかして魔族にとって【精霊の加護】を持つ人間は……

「い、いえ、違います。私は精霊使いとやらではありません！」

私は慌てて否定しました。

けれど、男は艶然と笑みを浮かべて言ったのです。
「精霊使いだろうが、そうでなからうが——【精霊の加護】を受けている人間は生かしておけない」

……ですよね、やっぱりそう言うと思ってました！【精霊の加護】は勇者に関わりの深いものですから、そりゃ気に入らないでしょうね！

現に男の持つ気配は、さっきまでとは違っていました。面倒くさいけれど片付けておくか、みたいな雰囲気だったのに、今は殺る気満々に感じられます。

「違いますって言うてるでしょうが！」

私自身が【精霊の加護】持ちなわけじゃないのに、殺されてはゴメンです。

男は私の言葉に再び眉を上げました。

「【精霊の加護】を受けているのにかい？」

「そ、それは——」

私は口ごもりました。守護を受けている理由を、口にするわけにはいかないからです。

男は、私が「勇者に求婚された女性」であるとはまだ気づいていません。

もし知られたら——今よりもっと状況が悪化するのには目に見えていますから！いえ、

この状況も十分悪いですけどね！

「どっちにしろ、見逃してやるわけにはいかないね。大丈夫、俺は女性には優しいから、苦しませずに一発で殺してあげるよ」

そう言って笑う男の掌に、鶏の卵くらいの大きさの黒い球体が出現しました。

何が大丈夫ですか！どこが女性に優しいって!? 優しさを履き違えているぞ、

魔族！

と心の中でツッコんでいる間に、男の掌上の球体は、どんどん大きくなっていきます。すでにメロンくらいの大きさに育っています。その黒い何かを見ると、背筋に冷たいものが走るのですが……

あれはヤバイです。何かわかりませんが、絶対にヤバイです。

「君一人だけ消したら、君を守護する精霊がうるさいんでね。シユワルゼの城にいる勇者とエルフに知らされても面倒だし。だから——その精霊ごと消してもらおうよ？」

スイカほどの大きさになった球体を手に、笑う魔族。

先ほどと同じ、ヒュンヒュンと空気を切り裂くような音がします。けれど、男はそのたびにヒョイツという感じで移動して、風の精霊の攻撃らしきものを避けるのです。

……自然そのものである精霊ごと消す？ そんなことが可能なのでしょうか。けれど、男はおそらく魔王配下の幹部。魔族の中では、魔王に次ぐ力を持つ存在。

その掌の黒い球体が放つ禍々しい雰囲気（まがまが）に圧倒され、私は魔族を見上げて、ぶるっと震えました。

……怖い。死にたくない。私は思わず小さくつぶやいていました。

「グリード様……助けて……！」

……左手の腕輪が、一瞬だけ熱くなった気がしました。

次の瞬間、目の前の地面が光を発して、そこに円をいくつも重ねたような形の魔法陣が描かれたのです。

その中から現れたのは——淡く光る金の髪を持つ美丈夫。

「何……だと？」

黒い球体を手にしたまま、魔族が驚愕（きょうがく）して目を見開きました。

「まさか……勇者!？」

いつものラフな白いシャツ姿に、聖剣を佩（は）いた勇者グリード様が、移動の魔法陣が放つ光をまといながら、私の前に立っていました。

「グリード様！」

見慣れた後ろ姿を認めた瞬間、私の全身にどっと安堵（あんじょ）の波が押し寄せました。ああ、

もう大丈夫だと、そう強く感じたのです。不覚にも、目にじわりと涙が浮かびました。

そんな私に、視線は空に浮く魔族に向けたまま、グリード様が言います。

「アーリア、下がっててください」

「は、はい」

その言葉通り、私は数歩後ろに下がりました。

「勇者？ なぜ勇者がここに……？」

黒い球体を手にした魔族が、赤い目を大きく見開きグリード様を見下ろします。次いで、その視線がグリード様の背に庇（かば）われた私に移り、そして再びグリード様へ——すると突然、はじめられたように魔族は嗤（わら）い出しました。

「アハハハ！ なるほど、なるほどね！ 道理で精霊（せいれい）がそのお嬢（むすめ）さんを護（まも）ってるわけだ。

そうか、君が勇者のお相手か」

私はうつ、となりました。どうやら、私が勇者の（本意ながら）婚約者であることがバレてしまったようです。ああ、バレて欲しくなかった……！

「新聞を読んで、勇者が求婚（こせうこん）したことは知っていたんだが……。相手が誰なのか、今までわからずにいたんだ。斥候（せつこう）を放つても、城には何百人と女がいるからね。これといった特徴のない『勇者の想い人』を見つけることはできなかったんだが……。やっとわかつ

たよ」

その言葉と、魔族の目に浮かんだ色に、私はぞっとして身を震わせました。これまでよりずっと強い殺意を感じたからです。

ピンチを抜けたと思ったとたん、別のピンチに陥おちってしまったようです。魔王を倒された幹部が勇者に恨うらみを持たないわけがなく、復讐くわしゅうするなら婚約者である私に目を留めないはずはありませんから！

このモブ顔のおかげで、記者どころか魔族にすら認知されずに済んでいたようです。が……今この瞬間から、私は彼らにとってその他大勢モブではなくなったのです。

ああああ、でもそれよりどうしても気になって、言いたいことが……！

「『勇者タイムズ』を読んでいるんですか？ それは魔族としてどうかと思うのですが！」

おっと、つい口に出してしまいました！ だ、だってとても気になるじゃないですか！ ところで買うんだとか、もしかして定期購読しているのかとか、あの号外をどこで手に入れたんだとか！

だけど、一番言いたいのは、これですよ、これ。

——魔族が『勇者タイムズ』読むなよ……！

これに尽きます。……ですが、私のツツコミはスルーされたようです。

「計画とは違うが、思わぬ収穫を得た」

魔族は目を細め、にやりと嫌な笑いを浮かべました。

その時、ずっと黙ったまま魔族を見上げていたグリード様が口を開きました。

「魔王グライディオスが配下、青アズールことジラルディエールか……」

——魔王グライディオス。おそらく、あのマツチヨ魔王の名前——真名まなでしよう。

魔族にとって、名前は単に個を区別するためのものではなく、自身の存在に直結している大事なもの。それゆえ、滅多に名乗ったりはしません。だから、誰も魔王の名前は知りませんでした。

魔族の真名はそれ自身が魔力を帯びていて、その魔力に耐えられない者が口にすれば、死に至ることもあるのだとか。魔王の名なら、なおさらでしょう。

私たち人間は、魔王が生きている間は魔王とのみ呼びます。そして魔王が勇者によつ